

キチュ河あるいは彼岸へのほとりで

六月六日(日)午後一時過ぎ。僕は今、キチュ河の中州にいる。あたりには誰もいない。目の前にはキチュ河の流れ、そして数十メートル先の対岸には手を伸ばせばすぐに届きそうな距離感で灰色の岩山がそびえている。川縁に腰を下ろした僕の背後では、ときおり雷鳴が轟いている。振り返ると鉛色の雲が山々をおおい、半天は暗く沈み、しかしもう半天には青空が覗いて、流れる雲は日に照らされて白く輝いている。不思議な光景だ。中州の林に視界をさえぎられてラサ市街の建物は見えない。ただポタラ宮とテレビ塔のある岩山の姿が山々に背後を囲われるようにして覗いている。

あたりには誰もいない。ただ僕だけがいる。そのことが何か不思議だった。ただ僕がいるということが。

*

yakホテルから西蔵長距離バスターミナルまでは、歩いて一時間ほど。途中、中心地の食堂で朝食。うまく意志が伝わらず、出てきたのは小肉まん十個入り二皿、それにスープ。僕は一皿しか注文しなかったはずだけれども、と思いながらも食べた。肉まんが胃袋がはち切れそうな気がした。

ポタラ宮のところで南下する道を取り、キチュ河の河沿いの沿河路をひたすら西へ。一昨日歩いたところを通り、さらに西へと歩いた。キチュ河沿いのそのあたりは並末道で、細長い公園のようになっていた。一昨日のような巡礼の姿はなかったけれども、ときおりゆつくりとくつろぐチベット人たちの姿が見られた。しばらく歩くと、色とりどりのタルチヨで、満艦飾に飾られた吊橋が見えた。どうしてそのように飾られているのか、理由は分からなかったけれども、ともかくキチュ河を渡る橋であることは確かなので、あとで渡ってみることにした。

さらに西へとキチュ河の流れに沿って堤防を歩いていくと、すでに街はずれという印象で、ときおり車が通る他は人通りもない。それでも汗をかきながらどんどんと歩いていくと、やがて青い空に突き刺さるかのような高い記念碑がそびえていて、道路の向かいが長距離バスターミナル。折しも自転車に乗った西洋人のカププルが出ていったところで、やはりここでチケットを買うのかと僕は安心する。

街はずれだからか、バスターミナルのあたりにも人影は少なく、また售票処の中にも人はいなくて、ひっそりとしていた。果たしてチケットを売っているのかどうかさえも分からなくて、しばらく立ちつくし、それから窓口らしき所に歩み寄った。さて窓口の男に声をかけようとする、どこにいたのか若い男がそれをさえぎるようにして英語の言葉をかける。しばらく片言の言葉を交わし、僕はその男が服務員であることを納得する。おそらく外国人専用の服務員で、また外国人が中国人の顔をしてチケットを購入するのを見張っていたのかもしれない。

英語と中国語の片言をチャンポンしながら、服務員から明後日のゴルドムド(格爾木、ガールムー)行きのチケットを購入した。料金は三九一元(FEC)中国人の料金の二倍以上でもとも高いけれども、今朝ヤクホテルにチェックインしてきた日本人(彼は中国人に成りすましてゴルドムドからラサまでやって来た)の情報によると、途中で公安のチェックが数か所であるということなので、外国人料金を払っていなくて問題になることを考えると、まあ仕方がない。バスの料金に二重価格があるということは経験がなかったので納得しきれないところはあるけれども、通達はいかんともしがたいのだ。

高い外国人料金のおまけなのだろうか、服務員は僕の宿泊先を尋ね、バスの出発は午前七時なので午前六時半にホテルの前で待っているようにと言う。ホテルまで迎えに来てくれるらしいのだ。時間が早かったので、もしかしたらバスターミナル付近のホテルに移る必要があるかもしれないと考えていたので、それは助かった。

售票処を出ると、正午過ぎの強烈な日差しが照りつけていた。喉が乾いたので、バスターミナル前の売店で、レモンジュースと紅梅を買った。沿河路を渡り、記念碑脇の堤防に腰を下ろして休憩した。記念碑では家族連れが写真を撮ったりしていたが、僕にはそれが何の記念碑なのか分からない。記された漢字がうまく読めなかったのだけれども、おそらくどこかからラサへと至る道が完成したのを記念してつくられたのだろう。

キチュ河の対岸にはすぐ山々がそびえ、雲の影が山頂を暗くしていた。彼方は右も左も山並だ。山々の頂には白く雪が残っている。キチュ河はそのあたりでは深い流れをたたえ、その水そのものはそんなにもきれいだとは思われなかったけれども、青緑色の流れは日の光に輝いていた。対岸の砂地にはヤギのような動物の姿が見えた。こちら側の岸辺にはヤクの皮で造ったヤクボートが船底を上にして干してある。ゴムボートを少し深くし、四角にしたようなボート。岸辺に立てかけた木の棒に

は、チベットの祈りの旗が風に揺れている。タルチョと呼ばれる青、白、赤、緑、黄の布をつないだもので、それぞれの布にはチベット文字のおそらくは経文と図が書かれている。

「チ…チ…」とどこかで水鳥が鳴いていた。

そのとき僕の心にぽっかりと浮かんでいたの『不思議』という大きな漢字だった。それをうまくは言えないのだけれども、そしてあえて言うてしまうとても陳腐な言葉しか思い浮かばないのだけれども、不思議だった。世界がこのようであるということが。僕がこのようであり、このように場を占めているということが。いわばここにこのようにしているということ、そのことそのものが。

ふと見ると、三人連れのチベット女性が来て、yakボートの船頭らしき少年に声をかけていた。しばらくの間交渉し、その間に追加の二人がやって来て、つごう五人でyakボートに乗り込んだ。ボートが水辺に滑り出すと、少年は力いっぱいオールをこいで、上流に向けてボートを進めた。流れの半ばまではどんどんと上流に進み、やがて河の流れに流されるようにボートはUの字を描いて対岸に到着した。

「そこは、彼岸」と、ふと僕は思った。もしかしたら、チベット世界というのは向う側にあるのかもしれない、と。僕はここにいて、ここをうろつきまわって少しはチベットに触れているような気がしているけれども、実はそのように思い込んでいるだけなのかもしれない。チベットというのは本当はこの河の向こう、彼岸、ついに僕がたどり着けない向こう側に広がる広大な領地のことであって、僕には想像さえできないものことなのではないのか、と。そして彼岸はもちろん死の国のことだ。チベットは死と地続きなのだ。死に囲われ、死に触れ、死に抱かれ、死のただ中において輪廻(りんね)としての生をつづること。荒掠とした岩だけの山々のどこかを目指して対岸を去っていくチベット女性たちの姿を見ながら、漠然と僕はそんなことを考えていた。

沿河路を東に向かって歩いていく。行きがけに目にした無数のタルチヨで飾りつけられたあの賑やかな吊橋を渡ってみようと思ったのだ。公園のようになっている並木道にはときおりゆっくりとチベット人たちが行き交っていた。木陰で、ひとりの少女が本を読んでいた。少女のかたわらを通るとき、ふとその本を覗き見ると、それはチベット文字の本だった。門外漢のぼくにとってはインドの文字に通じるところのあるような印象のチベット文字。圧倒的な力量で押し寄せてくる中国というものにさらされながら、チベットは生きつづける。その姿を象徴するかのような少女の読書姿だった。

長距離バスターミナルからは一キロメートルほどで吊橋に至る。無数のタルチョで満艦飾に飾りつけられた吊橋を見て、僕は何か不思議な気持ちがあった。タルチョというのはただ単なる飾りではなくて、祈りの旗だからだ。それにはチベット文字の経文や絵が書かれていて、家の屋上などにひるがえっている。チベット人たちがタルチョに込める祈りの意味合い、その深さ浅さは僕にはうかがいしれない。しかし、なにがしか聖的なものを感じさせるタルチョを無数にまとった吊橋は、その行き先が聖なる地、場所、あるいは死に通じる場所という気持ちを起こさせたのだ。

(それはおそらくついさつき、対岸に渡るyakボートを眺めながら、彼岸という言葉を思い浮かべていたことも関係しているだろう。もちろんチベット人たちがインド人たちのように河を聖と結びつけて考えることがあるのかどうか、僕は知らない。ただ単なる飾り付け、遊び心で吊橋を飾りつけているのかもしれない。)

吊橋の入口のところで、管理人に料金五角を支払い、吊橋を渡る。橋を渡りきると、そこは、ジャマリンカと呼ばれるキチュ河の大きな中州だ。そこには別に何があるというわけでもない。小屋のような納屋のような建物のかたわらをしばらく歩いていくと、あまり豊かであるとは思えない畑と一、二メートルほどの低い雑木林。そこを抜けると、所々に浅い河の流れとよどみ。石の河原。広い河原では二組ほどの家族連れがピクニックをしていた。ときおり、散歩をするような男の姿があった。

心の傾きのままに僕は河原を歩いていった。やがてときおり見えた人影はなくなり、中州のはずれに出た。目前にはキチュ河の流れ。そして向こう岸には巨大な灰色の岩山がそびえていた。

ともかく行止まりに出て、僕は川辺に腰を下ろして煙草を吸った。さつきあれほど強烈に感じた日差しはいつのまにか絶え、あたりは夕暮れのように薄暗く、静かだった。雨の降る気配は感じられなかったけれども、遠くで雷鳴が響いていた。振り向くと、川辺の木立の上にわずかに見えるポタラ宮を抱くようにしてそびえる山々を、鉛色の雨雲がおおっていた。

僕はひとり川辺に腰を下ろして、生(性)のことを感じていた。それはチベットの人々には何の意味もなさないことなのかもしれないけれども、僕が座っているその場所は。聖(死)との境界、その縁のように僕には感じられたのだ。そして聖(死)と接触するとき僕たちが感じるのは、「生きる」という時間軸にまのびした日常や物語のことではなくてむしろその切斷、いわば「生(性)」という名詞でしか表すことのできない切実性なのだろう。

振り返って立ち上がると、ついさっきまで不思議なもののように曇天の一角に覗いていた抜けるような青空は消えて、空は一面の雲におおわれていた。

河原を吊橋の方に歩いていくが、家族連れや散歩者の姿も見えなかった。まるでこの広い中州にひとり取り残されたかのような感じで、僕は少し心細く、少し急ぎ足で吊橋まで戻ったのだった。

吊橋を渡り、ジャマリンカから再び沿河路へ。

午後三時。ラサ市街には雲が立ちこめて、まるで夕暮れのような薄暗さだった。気のせいか、沿河路の情景や行き交う人々の姿にも、一日を終えて何か店仕舞いをするときのような疲労と当てのない解放感のようなものが感じられた。まるで一場の夢、というようなジャマリンカからラサの日常に再び足を踏み入れる前に、煙草を一服。ぼんやりと沿河路を眺めていた。ゆっくりと通りを行き交う人影。木陰で憩っている人。

突然、人の叫び声のようなものが聞こえたので、そちらの方に目をやると、若いチベット女性が、長袖のまさにドテラのようなチュバの袖を引きずるようにして、ふらふらと歩いていた。片手には笛のようなものを持ち、歌のような叫びのような声をあげている。時々振り返るようにして、悪態をつくかのように大きな声をあげる。あたりを睨みつけるような視線を放ったあと、またふらふらと酔っ払いのような足取りで歩いていくのだった。

何か正気を失うほどの悲しいことがあったのだろうか、それとも本当に気が狂っているのか、僕には分からない。だけれども何かただならぬ感触に、僕は立ち去ることもできないまま、彼女が視界から消えてしまいうまで見つめていた。

別にこれという目的もないまま市街地へと戻り、ポタラ宮のちようど南にある文化公園へと行ってみた。驚いたことに公園の入口から伸びている道沿いには、ずらっと食べ物屋台が並び、まるでお祭りのように家族連れで賑わっていた。それを見て、今日が日曜日だということに思い当たる。少し腹が減っていたけれども、そろそろ宴もお開きという雰囲気だったし、家族連れで楽しんでいるという様子の人々にまじって屋台に割り込むというのも気が引けたので、そのまま文化公園の道を通り抜けた。突き当りは労働人民文化宮。閉ざされた文化宮前の石段に腰を下ろして休憩した。目の前には射的屋さん。立てかけた戸板のようなものに十数個の風船をつけてそれを的にし、おもちゃのライフルで撃つというもの。

文化宮のあたりからはポタラ宮の全貌が見渡せる。垂直のベルサイユといわれるだけのことはあって、幾度見てもその美しさは視線を捉えて離さない。その建築はダライ・ラマという権威のなせる技、そしてダライ・ラマに思いを寄せるチベット人たちのなせる技なのだろうけれども、それにしても標高三五〇〇メートルを越える荒野のようなチベット世界において、それは秘められた真珠のようであり、また何かとんでもない奇跡でも見ているような気にさせる。

いつまでも見ていたいポタラの姿だったけれども、楽しみは明日というようにふんぎりをつけて（明日はいよいよポタラの見学にいく予定だった）、僕は文化公園をあとにして旧市街の方に向かった。というのも清真寺（イスラム寺院）の近くにあるという清真ラーメンを食べたかったからだ。それにお土産とチベット音楽のテープを買うこと。

八角街の方に向かう大通りを歩きながら、いくつかの百貨商場などを覗いてみたが、買う気にはならない。買い物をするにはやはり八角街の賑わいの中でないと、という気がしたのだ。

大昭寺前の広場にたどり着くと、相変わらずのチベット人たちの賑わいになにかほっとしたものを感じながら八角街をぐるりとひとまわり。八角街に面したいくつかの音楽店をまわって、チベット音楽のテープを買った（二本で一五元）。それから大昭寺の門前の露店で二〇センチ角の大きさのタルチョ（三元）。タルチョは大きなものは五〇センチ角くらい、小さなものは一〇センチ角くらいの大きさだ。様々な装身具や仏具などにも興味を引かれたけれども、物を持って帰っても仕方がないという気がしたので、最小限のお土産にした。

八角街を東に通り抜けるとラサの旧市街。しばらく歩くと、八角街の賑わいは嘘のように静かな通りだ。道幅は二、三メートルで、道の両側は白い漆喰の民家の壁や塀。古びた漆喰はなかはげ落ち、所々積み上げた煉瓦がむき出しになっている。所々に商店や茶店などの店があるのだけれども、看板の多くはチベット文字で、またその内部は薄暗くて入りづらい。

いつの間にか雲間から日が差し始めていた。少し道に迷い、ようやく清真寺の前に着いたときには、今日一日歩きまわった疲れと暑さとでぐったりとしてしまった。たまたま目についたアイス屋さんからアイスを買って、清真寺前の石段で休憩した。女の子が二人、休憩する僕のかたわらで遊んでいた。人民服に白いキャップを被ったムスリムのじいさんが石段に腰を下ろして、女の子たちに何事か言葉をかけていた。じいさんと同じようにムスリムの白いキャップを被った男たちがときおり自転

車に乗って通り過ぎていく。チベット仏教の聖地、ラサにひっそりと息づくムスリムたち。僕はなにか不思議な気がした。

さて、旧市街の東の清真寺から大昭寺の方へと清真ラーメンの店を捜して家々のあいだの路地をたどったけれども、店を見つけることはできなかった。べつに他の食堂でもよかったのだけれども、チベット文字の店には入りづらく、またヤクバターの匂いが効いていたのかもしれないけれども、チベット料理はなんとなく受け付けなかったので、結局ヤクホテル隣の食堂で食事をすることにした。

市街の入り組んだ路地はときおりちよつとした広場に出るようになっていく。そんなところには露店と、若者たちの遊び場として野外ビリヤードが店を出している。腰に大きなナイフを下げ、頭に赤いターバンのようなものを巻き付けた若者たちがビリヤードに興じていた。(それはチベット東部地方の男たちの伝統的な髪飾りだ。)

ヤクホテル隣の食堂で食事していると、チュバに身を包んだチベット女性たちが入ってきた。見るともなく見ていると、彼女たちはお土産物の訪問販売なのだ。たまたま食事は少なかつたので、すぐに彼女たちは僕のテーブルにやって来た。品物は八角街で見かける首飾りなどの装身具、それに装飾をほどこした仏具のようなもの。どれもが数十元もするものだったし、あまり興味を引くものもなかつたので断わりつつけたが、何人かの女たちは入れ替わり立ち替わり自慢の品を出してくるのだった。

ある女が直径一〇センチ弱の小さなシンバルを出してきた。おそらく宗教音楽に用いるのだろうけれども、金属性のシンバルはずしりと重く、軽く打ち合わせるととてもいい音がし、余韻もいいのだった。ふと、いいなと思ひ、値段を尋ねると、七五元。しばらく交渉し、四〇元で買った。店の人は、そんなものを四〇元も出して買ってどうするか、というように笑っていたけれども、自分としては満足だった。(実は以前に同じようなものをインドで買って、詩の朗読の小道具として使ったことがあるのだけれども、ずしりと重たいこのシンバルに比べるとおもちやのように感じられたからだ。)

※

午後九時、ようやく暮れ落ちたラサに夜の気配が忍び寄ってきた頃、今朝ヤクホテルにチェックインしてきた日本人の若者が僕を訪ねてきた。しばらく話したあと、

「ビールでも飲みに行きませんか」と言う。

ついさつきネパール人たちのグループ五人が僕のいる部屋にチェックインし、ひとりだけ異分子という感じで身をもてあましているところだったので、喜んで彼とともに街へ繰り出した。

彼の案内で入った店は、ヤクホテルから北京東路を渡ったところ、すぐ近くのスナック風の酒場だった。ソファアに腰を下ろして、ビールを注文。

彼は中国への元留学生で中国語は堪能。幾度かチベットへも来ているということだった。話題はまず先日にあったというデモのこと。五月二六日にチベット人たちの大規模なデモがあり、噂では八人ほどが死んだということだ。僕がチェックインした日に同室だった日本人の話によると、その日ラサ市街には催涙ガスが立ちこめ、ヤクホテルの中にいても鉄砲の音が聞こえたという。

彼はビールを飲みながら、ラサという街のもうひとつの顔を話してくれた。

ガイドブックの地図を見ただけでは分からないけれども、この町には他の中国の街に比べて、圧倒的に警察、軍関係の施設が多いのだという。八角街を中心とするチベット人街では、テレビカメラが据えられて二四時間の監視を行っている。(あいにく僕はテレビカメラを確認することはできなかった。)

中国人のチベットへの組織的な入植政策によって、チベットでは今やチベット人よりも中国人の方が多くなっている。もちろんラサでもそうだ。

学校はチベット学校と中国学校があり、選択ができるけれども、もちろん進学にせよ、就職にせよ、なにかと中国学校の方が有利になっている。親はもちろん本心としてはチベット学校に行かせたいのだが、将来のことを考えると中国学校に行かせることになる。

人口の面でも、文化の面でも、チベット人たちは中国によって圧倒され、片隅に追い込まれているように感じている。チベット人たちは自らの土地において次第に少数になっていき、チベット語もまた少数者の言葉として片隅に追いやられていく。

チベット人たちの中国に対する反感は深く、特に夜はデョカンのあたりは中国人は歩けない。自分もなるべく中国人に見えないようにつとめて英語を話すのだ、と彼は言う。

ラサ郊外には監獄があり、デモなどでつかまるとそこに入れられて、それこそ半身不随になるまで殴られる。警官はただの警棒とは違う電気棒で殴りつけるのだ。

そして彼はたまたま居合わせたチベット人を紹介してくれた。彼の家族か友人かがデモで逮捕され、監禁されているという。若いチベット人の男とは言葉が通じないということもあって、少しの挨拶を交わしただけだったけれども、僕はその男に生々しいしかし硬質な闘争の現場を見たような気がした。そこに足を踏み込もうとすれば顔を洗って出直してこなければならぬ。

酒場からヤクホテルへの帰り道、暗い北京東路をたどりながら、僕は『現場』という言葉に突き当たっていた。それはもともとの本意ではなかったけれども、いつのまにかチベット、ラサというロマンチックなイメージを浮遊するようにして漂っていた僕の旅が突き当たった遮蔽だった。いわば観光者はもとより散歩者がそこから先へは進むことができない境界。やんわりとしかし断固とした拒絶によって立入を拒まれる領域。しかし『現場』を共有するというのはどうだろうか。チベットの人々に成り代わって、反中国の怒りを自らの中に燃えたさせること？ おそらくそうではない。しかし僕にはまだ何の答えもないのだ。あえて言うならば、『霧散した現場』それが僕であり、僕がそこからやって来た僕たちの社会の実相なのだ。そこには『現場』という言葉がはらむように、輪郭のある問題群が焦点を結ぶことはない。たとえばどうかと思うけれども、僕たちの生というのはお昼のワイドショーなのだ。次々に立ち現われる問題の平面を僕たちは滑っていき、その都度微分的な切実性に出会いもするのだけれども、それらは決して統合的には働かない。瞬間的に像を結んだ『現場』は次の瞬間には霧散するのだ。無数の現場の平面を滑っていく僕たちは、つねに、すでに、ただひとつの現場を取り逃がしている。いわば現場の真空地帯としての僕たち。

僕は自分自身の中国散歩を振り返り、何か後ろめたいような感じに付きまとわれていた。だけれども、すでにかき消えた『現場』に郷愁してもそんなに意味はないし、それがまた僕自身の『現場』でもあるかのように幻想してチベットに肩入れすることにもそんなに意味はない。(もちろんアムネステイにおいても問題にされているような人権抑圧が許されていいわけではない。)

ヤクホテルのベッドに横たわり、すでに寝静まったネパール人たちの大きな山岳装備をぼんやりと眺めながら、僕は、

「切実に散歩すること」

とふと眩いていた。もちろんそんな言葉がなんらかの回答になるとはとも思えなかったけれども。

